

草双紙の洒落言葉（一）

—— ならずの森の尾長鳥 ——

草双紙の趣向のひとつとして、「ありがた山」「のみこみ印」といった言語遊戯の洒落言葉の使用がある。これらは各作品で独自に創作された場合もあるが、定型句が繰り返して用いられている場合が多い。

安永七年（一七七八）刊、恋川春町画作の『辞闘戦新根』（鱗形屋板）には、「大木の切り口太いの根」「一ぱいのみかけ山のかんがらす」「鯛の味噌ず」「四方のあか」「どらやき」「さつまいも」「ならずの森の尾長鳥」「放下師の小刀のみこみ印」といった言葉が擬人化されたキャラクターとして登場する。板元鱗形屋ら出版側の人間たちが、以前のよう
に自分たちを厚遇しなくなったことを理由に暴れ回り、最後は鱗形屋の蔵にいた唐紙表紙たちに退治され、反省する展開となっている。作中に擬人化された洒落言葉は、現存

松 原 哲 子

する草双紙での使用状況を見る限り、鱗形屋板の初期草双紙、中でも「鳥居清経画」と署名のある作品との関係が深いことが確認される⁽¹⁾。よって、本作は安永四年（一七七五）の『金々先生栄花夢』以来新しい作者として草双紙を作ってきた春町が、従来の鱗形屋板の草双紙に散見された洒落言葉を、新たな方法で作品の趣向としたものだと思われる。しかし、その一方、『辞闘戦新根』に登場する洒落言葉を、実際の鱗形屋板の初期草双紙中の使用例と比較してみると、いくつかの齟齬が生じており、春町が示した洒落言葉のあり方は当時の草双紙の状況をそのまま表したものであるのではないことがわかる。

そこで今回は、『辞闘戦新根』に登場する洒落言葉の内、出自が他と異なると考えられる「ならずの森の尾長鳥」を

取り上げる。

「ならずの森の…」は京都下鴨神社の境内にある「糺の森」をもじった表現で、上方から江戸に下ったものと想定される。

「ならずの…」「ならずの森の…」となつてゐる上方での使用例を挙げると以下のようになる。

宝永元年（一六二四）『三疋猿』支考編。井筒屋庄兵衛刊）

いのりつつならずの宮にとしくれて 蘭北

天和二年（一六八二）『好色一代男』（井原西鶴著）

「是はならずの森の柿の木口へはいる物こそ」と、葉
鏝たぎれば、

元禄五年（一六九二）『好色由来揃』

不成野守之郭公出処

元禄六年（一七九三）『浮世栄花一代男』（井原西鶴著）

「我さる事あつて、しばしのうちはまことのちぎりは、
ならずの宮への大願」といへば、

元禄十四年（一七〇一）『けいせい色三味線』（八文字屋板）

どふもならずの森のほとゝぎす。啼てきかして其後。

宝永三年（一七〇六）『風流曲三味線』（八文字屋板）

今ははや夜盗のかせぎもならずの森のこかげに。

宝永七年（一七一〇）か『野白内証鑑』（八文字屋板）

大かたはならずの森の郭公

正徳二年（一七一一）『野傾旅葛籠』（八文字屋板）

今いふて今はならずの森の郭公

正徳五年（一七一五）『艶道通鑑』

力わさにも分別にも。ならずの森の木菟ぞと。

享保四年（一七一九）『義経倭軍談』（八文字屋板）

さきから申こまねば急なる御げんはいかなくならず

の森の郭公飛鳥のおちるとは此君の事ぞかし。

宝永元年『三疋猿』の「ならずの宮」は、元禄六年の西鶴作『浮世栄花一代男』にも同形の例が確認できる。「不可能である」の「ならず」と「ならずの宮」を掛けていること、同じく西鶴作の『好色一代男』で「ならずの森の…」の型が見られることから、「ならずの宮」も同類の言語遊戯と考えられる。元禄五年『好色由来揃』には、「ならずの森のほととぎす」の「の森」は正しくは「野守」であつたと、その由来について記されている。由来の真偽のほどは定かではないが、この時期既に「ならずの森のほととぎす」という形が定型となつていたことが確認される。「森の」の下に添えるものについてはいくつかのバリエーションがあるが、やはり「ほととぎす」が多い。

江戸に広く伝わつたのもやはりこの形であつたと考えら

れる（○印を付したものは草双紙の例）。

○延享（一七四四）以前『鼠のよめ入り』（西村重信画）

すこしうてた。さしみにはならずのもりのほと、きす

宝暦二年（一七五二）『教訓雑長持』

船賃湛と出す事はならずの森の郭公。

○刊年不明『七小まち』（画工名なし、鱗形屋板）

三百はならづのもりのほと、きす

○安永四年（一七七五）『大福／富突始』（鳥居清経画、鱗形屋板）

かくなまをためねばならずのもりのほと、きす

○安永五年（一七七六）『風流／上下の番附』（鳥居清経画、鱗形屋板）

はねさせねばならづのもりのみそざい

はねさせねばならづのもりのみそざい

○寛政元年（一七八九）『奇事中州話』（山東京伝作、北尾政美画、葛屋板）

まじめなせうはいはならずのもりのてんぐさま

○寛政三年（一七九一）『人間一生胸算用』（山東京伝作、北尾政演画、葛屋板）

女郎かいかんじんの手がなくてはならずのもりのお

ながとりと

○寛政四年（一七九二）『桃太郎発端話』（山東京伝作、

勝川春朗画、葛屋板）

こうはらがへりま大こんときてはふと印といわれて

も、あとへもさきへもゆくことはならずのもりのみそざい

寛政八年（一七九六）『仮根草』（紅月楼著）

夫さへもわつちらにわ。ならづの森だから。一口つ、

も長うたのにた山をさへづるがい、引サ。

○寛政八年（一七九六）『怪席料理献立』（望月窓秋輔作、榎本屋板）

榎本屋板）

箱根先といふばけものぞうしにてんじやうをみてこれ

はならづのもりのおながどりと

文政五年（一八二二）『世中貧福論後編』（十返舎一九著）

此たびの相談もならずの森の時鳥と。

一覽すると、上方の例に比べて「ならずの森の」の下に

続く言葉のバリエーションが豊富にみえるが、全体として

は、江戸の地でもやはり「ならずの森のほととぎす」の形

が定型であったことが確認される。

先掲の安永七年『辞闘戦新根』では「尾長鳥」となつて

いるが、同形が確認できるのは寛政三年の山東京伝作『人

間一生胸算用』と寛政八年の『怪席料理献立』の二例のみ

である。先掲の上方の用例にも「尾長鳥」を付す例はない。

京伝は、洒落言葉の利用や作品の趣向取りにおいて、『辞闘戦新根』をはじめとする春町作品の影響を受けたことが確認される草双紙作者である。よって、『人間一生胸算用』の使用例もまた春町の影響下にあると想定される。また、「ならずの森の天狗様」（『奇事申州話』）・「ならずの森の鶴鷄」（『桃太郎発端話』）といった別の形が見える。これらは京伝が伝統的に草双紙に登場した洒落言葉を一作品中に吹き寄せ的に多用するという趣向を取り込んだ例であるが、この手法もまた春町の影響下にあるといえる。また、寛政八年『怪席料理献立』にも「ならずの森の尾長鳥」の例がある。『辞闘戦新根』に登場人物として擬人化された「天井みたか」と同形の「天井を見て」が示されており、本作品もまた春町作品に直接または間接的に影響を受けたものと考えられる。

先に述べたように、『辞闘戦新根』で擬人化された洒落言葉について、作者春町は、従来の鱗形屋板の草双紙と結びつくものと認識していたものと考えられるのだが、現在までに「ならずの森の尾長鳥」の用例は確認できていない。先行する鱗形屋板では「ならずの森のほととぎす」（『七小まち』・『大福／富突始』）および「ならずの森のみそさびい」（『風流／上下の番附』）の二種三例が確認されている。筆者はかつて鱗形屋板の初期草双紙について悉皆調査を試み

た。^③よって、この三例が現存する資料に見える用例の全体像を大凡表しているといえる。伝統的に言語遊戯の洒落言葉を多用している鱗形屋板の初期草双紙の状況を踏まえると、これは決して用例数が多いとはいえない。また、草双紙での使用例を編年的に追った結果としても「ならずの森の：」は、『辞闘戦新根』の他の洒落言葉とは異なり、特に鱗形屋板の草双紙と結びつくものとはいえない。この言葉は談義本・洒落本・滑稽本といった草双紙以外の文芸での利用や、八〇年程度の時代的な広がりも確認される、上方下りの洒落言葉なのである。

では、なぜ春町は『辞闘戦新根』の登場人物としてこの言葉を擬人化させたのか。この問題を考える上で注目されるのは、安永四年『大福／富突始』および『風流／上下の番附』の存在である。共に鱗形屋板で鳥居清経画の草双紙である。両作に見られる「ならずの森の：」以外の言語遊戯の洒落言葉の使用例を示すと以下の通りである。

○『大福／富突始』

このあとでは御きちれいのたいのみそづでよものあか
をきこしめしませう（十オ）
いやはやいつにかはらぬほうねん上下ばんみんなのみか
けやまてこさります（十ウ）

そんならよものあかをのみかけ山になされて(十二ウ)の例が見られる。

○『風流／上下の番附』

かの山ぶきいろをちかりかけ山とでかけんと(二オ)さけはまいらず。をれひきのやへあんころたたくさんとりにやれ(二ウ)

何こともほうかしのこがたなでわれらのみこみすがたあかぞうをちそうする

ゆすのすしがあつた。ざつとみそづを申付ました(三オ)

かのあげさげは此は、がのみこみ山(三ウ)

かうぶつどらやきかふてくふぞや(四ウ)

はらのたつ。てんじやうみせてこますぞ(五ウ)

なだいのどらやきのまる介さつまいものあま^{前説不忠}をさそひて

こいつらはふとじるしなきやんめらだ(六ウ)

どらやきさつまいもおそめをうけとつて(七オ)

以上のように鱗形屋根の草双紙に散見される洒落言葉が多用されており、両作共伝統的な鱗形屋根の特徴をよく表しているといえる。ただし、「鯛の味噌ず」と「四方のあ

か」、「どらやき」と「さつまいも」をそれぞれ一対にする例は初期の鱗形屋根には見られない、全体数もごく限られた用例である。

先に述べたように、「ならずの森の：」は『辞闘戦根』に登場する他の洒落言葉とは出自が異なっており、使用頻度も高いとはいえない。そのような状況下で、同じく、使用された作品や年代が限られている「鯛の味噌ず」「四方のあか」および「どらやきさつまいも」の二組が登場する作品に、この言葉が同時に登場している例が確認されるという事実には何らかの意味を読み取ることが可能だと考えられる。つまり、春町が『辞闘戦根』に登場人物として採用する洒落言葉を採用する際に、伝統的な鱗形屋根の草双紙を編年の目を通した上でふさわしいものを選び出したのではなく、何か特定の作品から丸ごと採用した可能性が考えられるということである。もしも、取材した特定の先行作品が存在したとするなら、現時点で、それは『辞闘戦根』刊行の安永七年に近い時期の鱗形屋根であったように想像される。さらに、『辞闘戦根』は何か具体的な素材の存在を感じさせる一方で、「大木の切り口太いの根」のよう³に、実際の鱗形屋根には存在しない、明らかに春町が誤って使用した言葉も存在する。これは天明三年(一七八三)『草双紙年代記』(岸田杜芳作、北尾政演画、和泉屋根)が

丁寧に練った上で鱗形屋根の初期草双紙を象徴する洒落言葉を選択しているのは対照的⁵⁾で、安永期の春信の執筆姿勢を探る上でひとつの材料になるものと思われる。

注

(1) 拙稿「草双紙における流行語の位置」(『近世文芸』第六十八号、平成十年六月) 参照。

(2) 拙稿「菊寿草」考」(『江戸文学』三五、平成十八年十一月、ペリかん社) 参照。

(3) 拙稿「鱗形屋根絵外題考」(『近世文芸』第八十七号、平成二十年三月)

(4) 正しくは「大木の生え際」。注一に同じ。

(5) 拙稿「草双紙年代記」考 — 上巻部分を中心として —
(『実践國文學』第六十九号、平成十八年三月)

(まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師

実践女子大学大学院博士課程

平成十四年度単位取得

満期退学 博士(文学)